



## 羅針盤

松永 佳世子

*Kayoko Matsunaga*

藤田保健衛生大学医学部皮膚科 教授  
Visual Dermatology 編集委員



## 皮膚科医の力とネットワークで安全・安心な国を作ろう！

最近、化粧品の安全性を揺るがす2つの大事件が発生しました。一つは2011年5月20日に自主回収になった(株)悠香の「旧茶のしずく石鹸」の経皮感作による全身性コムギアレルギー、もう一つは、2013年7月4日に自主回収になった(株)カネボウ化粧品の「ロドデノール配合化粧品」の使用後に生じた脱色素斑の事例です。

現在、日本アレルギー学会の特別委員長をしておりますが、旧茶のしずく石鹸のコムギアレルギーは、その原因がグルパール19Sという石鹸の泡立ちを保つ添加物である加水分解コムギであることが解明されて、確実例は2,026例にのぼりますが、自主回収から2年半を経過した現在は、多くの患者さんの特異抗体も下がり、コムギの摂取が可能になってきています。

ロドデノール配合化粧品を使用した人の2%、16,864名にまだらの脱色素斑が生じた問題も、日本皮膚科学会の特別委員長も務めておりますので、疫学調査研究と病態解明を行い、患者さんと医療者に正しい情報を提供し、診断と治療に役立てるために活動しています。

さて、私が皮膚科医になった1977年、大阪で18名の黒皮症患者が化粧品会社7社を相手に黒皮症訴訟をおこしました。恩師の早川律子先生、上田宏先生ともに患者の詳細を収集し、原因を究明する共同研究に参加しました。その結果、赤色219号に含まれた1-フェニルアゾ-2ナフトールという夾雑物が第一の原因で、また香料の一部も原因であることがわかり、これらを化粧品メーカーが自主規制した結果、黒皮症の問題は約10年を経て終焉しました。

当時、化粧品の安全性担当者は、臨床現場からの情報を熱心に収集し、原因分析の技を磨き、予知テストの開発などを行いました。その結果、安全性の研究が進歩しました。30年余の歳月が流れ、当時を知る化粧品メーカーの研究者も退職し、企業内でも学会でも化粧品の安全性についての関心が薄れてきました。黒皮症患者を診療した皮膚科医も少なくなり、私は大きな不安をもっていました。当科では、日本化粧品学会や日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会において「化粧品による接触皮膚炎を疑いパッチテストを施行した症例のまとめ」を2006年から現場の実態と問題点を継続して報告してきましたが、学会での関心は少なかった気がします。そのなかで、今回の2つの化粧品による健康被害が発生しました。

「もしかして?と思う力」と、「まさか?と思わない力」が接触皮膚炎の原因を正しく診断することに重要です。今回の特集「クイズ!接触皮膚炎」は、読者の私たち皮膚科医が、その力を培うよいテキストになると思います。また、皮膚科医として接触皮膚炎の原因をパッチテストで明らかにすることが、患者さんに役に立つばかりか、皮膚科医の診断力を向上させます。

2014年日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会では、ホームページから、接触皮膚炎、接触蕁麻疹等症例の情報を随時入力できるwebサイトを立ち上げます。症例情報を医療・企業・行政そして広く社会が活用し、安全で安心な国にする大きなネットワークの中心に、いま、私たち皮膚科医がいます。